

考えることを楽しみ，すすんで表現する子どもの育成（2 年次） ～新聞活用に着目した，思考力・表現力を育む指導の工夫～

津南町立津南小学校

1 NIE 実践のねらい

（1）研究主題の設定について

平成 26 年度，27 年度の 2 年間「かかわり合いを通して自分の考えを深め，すすんで表現する子どもの育成」を研究主題として国語の授業研究に取り組んできた。その結果，ペアやグループ等で仲間とかかわり，対話することにより自分の考えを再考する姿が見られるようになってきた。そして，国語の学習の中で自分の思いや考えを進んで表現しようとする子どもが増えた。ただし，表現する姿に注目していたため，表現するまでの思考過程における具体的な手立てについては，あまり明らかにすることはできなかった。「かかわり合うこと」だけに留まらず，子どもの主体的な思考を促す手立てについても検証していく必要が出てきた。

そこで，平成 28 年度から研究テーマを「考えることを楽しみ，すすんで表現する子どもの育成」とした。「表現力」に加え，その表現に至るまでの「思考力」にも着目し，思考力，表現力を育むにはどのように指導していけばよいのか，指導のあり方を明らかにしていきたいと考えた。「子ども自ら考えてみたいと動き出す姿＝考えることを楽しむ姿」と捉え，研究を進めてきた。また，研究教科を「国語」に限らず，教師一人一人の専門分野を発揮しながら，広く「思考力」「表現力」を育む指導のあり方を全体で共有していくことにした。

（2）NIE 実践のねらい

実践委嘱を受ける前（平成 27 年度）の全国学力学習状況調査の結果を見ると，子どもにとって「新聞」は身近にあるものでありながら，「新聞を読んでいる」と答える子どもは全国や県に比べ，低い値を示した。各学年の Web 診断問題でも，新聞にかかわる問題の正答率が低い傾向にあった。子ども自身が新聞のもつ情報源としての価値や魅力を十分に見出せていないことがうかがえた。

昨年度，今年度と 2 年間の NIE の実践委嘱を受けたことを契機として，新聞活用に着目した思考力，表現力を育む指導のあり方について研修を推進してきた。そこでは，子どもが「考えたい」「表現したい」と思える学習を「新聞」を生かしながらどうつくればよいかを研究の大きな視点としている。また，子どもにとって新聞を身近にしていく日常活動についても検討を加えてきた。そして，それらの実践を全体で共有し，成果と課題を明らかにすることで，主題に設定した「考えることを楽しみ，すすんで表現する子ども」の育成を実践していく。

2 実践の概要

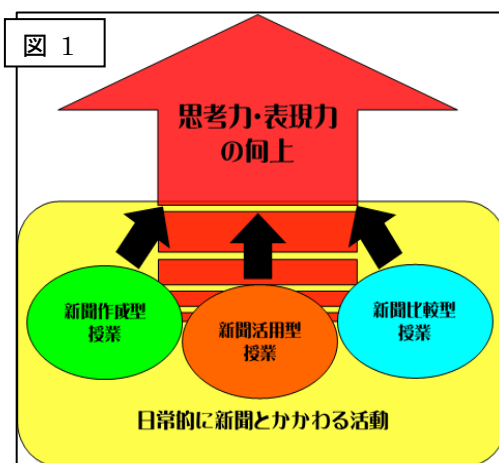
（1）研究内容

前述の研究主題の具現化を目指し，新聞活用に着目した，思考力・表現力を育

む指導の工夫について、学校教育全体の活動や授業実践を通して探ってきた。

新聞を活用した授業実践を糸魚川東小学校の先行実践をもとに「新聞作成型」「新聞活用型」「新聞比較型」の3つに分類した(図1)。表現活動として、新聞を作成する学習を「新聞作成型」、新聞の記事を資料として活用したり、新聞の形式を学んだりする学習を「新聞活用型」、複数の新聞を比較する中で、伝わりやすい記事の書き方を学んだり、考えを深めたりする学習を「新聞比較型」とした。

また、子どもが新聞に親しみ、日常的に新聞とかかわる活動を学校教育全体の中でどのように位置付けていくかを検討し、実践していくことにした。授業実践においては、育てたい子どもの思考力・表現力と授業における新聞活用の型を以下のようにとらえた。



思考 にかかわる 6つの力	・多面的に見る力(多様な視点に立って対象を見る) ・順序立てる力(視点に基づいて対象を並び替える) ・焦点化する力(重点を定め、注目する対象を決める) ・比較する力(対象の相違点、共通点を見付ける) ・分類する力(属性に従って複数のまとまりに分ける) ・理由付ける力(意見や判断の根拠・理由を示す)	●新聞活用型
表現 にかかわる 4つの力	・経験したこと等を順序立てて話す力、書く力 ・相手や目的に応じて、筋道を立てて話す力、書く力 ・目的や意図に応じて、考えたことや伝えたいことを的確に話す力、書く力 ・写真や図、表等と関連付けた文章を書く力	●新聞比較型 ●新聞作成型

※参考資料「考えるってこういうことか! 思考ツールの授業」「糸魚川東小 H26 研究のまとめ」

(2) これまでの授業研究の概要

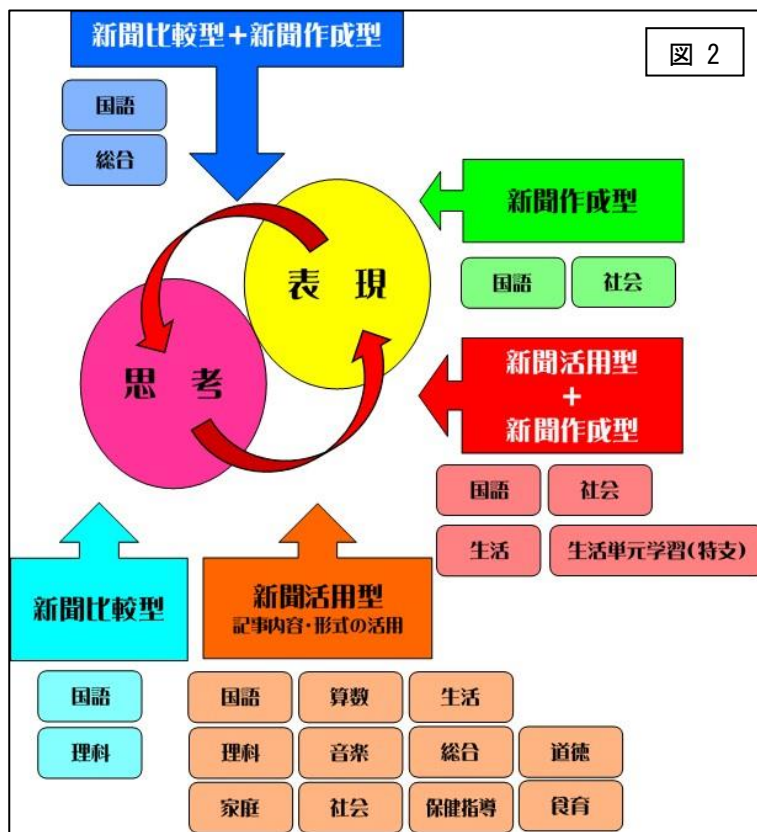
平成 28・29 年度、「一人一公開授業」を合い言葉にして、授業改善をもとに実践を積み重ねてきた。研究教科を絞り込まず、教職員一人一人が教科の専門性を生かして重点教科を決め、新聞活用に着目した「思考力・表現力」を育む指導の工夫を追究してきた。図2は、2年間の新聞活用実践の教科および新聞活用の型を図にまとめたものである。

この図から、教科を問わず、さまざまな学習の場面で新聞活用を行うことが可能であることが分かる。また、新聞活用の多様性と学習効果を発揮する大きな可能性を示唆している。

糸魚川東小学校の先行実践から学んだ3つの活用型をもとにして、その活用型を組み合わせることで単元構成した実践がいくつか提案され、津南小独自の新聞活用の型が生まれた。具体的には、国語科や総合的な学習の「新聞比較型+作成型」や

社会科や生活科といった「新聞活用型＋作成型」である。新聞を単発で活用するだけでなく、その学びを「新聞を作成する」形で自分の表現に生かそうとする単元構成がさまざまな教科で提案された。新聞活用に着目した連続性のある学習が可能であることが明らかになった。

実践を支える校内研修体制としては、全体授業公開を年に3回行い、ねらいの達成と手立ての有効性、新聞活用の価値について「ワールド・カフェ方式」の協議会スタイルを取り入れた。全職員で活発に意見を出し合いながら協議することで、NIEについての理解を一層促し、研究全体への意識向上を図った。また、新聞活用にかかわる書籍やワークシートの用意等、授業改善、新聞活用がしやすい環境を整備した。



3 今年度の実践例

(1) 授業研究から

今年度は、研究主題の実現を目指し、先行実践校の糸魚川東小の3つの活用型を組み合わせた「新聞活用型＋作成型」の実践が多く展開された。その中から3つの実践例を示す。

① 第2学年 「生活科」×「国語科」実践 <新聞活用型＋新聞作成型>

●単元名：「きらめき遊びランド」×「作り方をせつ明しよう」

●単元の目標：1年生に自分たちが作ったおもちゃの遊び方を伝えるために、分かりやすい説明の順序と、その説明のしかたを理解し、自分の表現へと生かすことができる（国語）。

●育てたい思考力・表現力

【思考力】比較する力・順序立てる力

【表現力】相手や目的に応じて、事柄の順序を考えながら書く力

●活用した新聞記事

2017年2月21日 新潟日報

「週刊ふむふむ」

●新聞活用の意図

記事の内容は、低学年でも作ることが



できる手作りおもちゃが多数紹介されており，子どもたちが興味関心をもっておもちゃ作りに取り組めると考えた。記事の一部には，おもちゃの作り方の内容や説明の仕方がやや難しい部分があるため，やさしい言葉に修正したり，順序を表す言葉等を加筆したりして，教材として活用した。

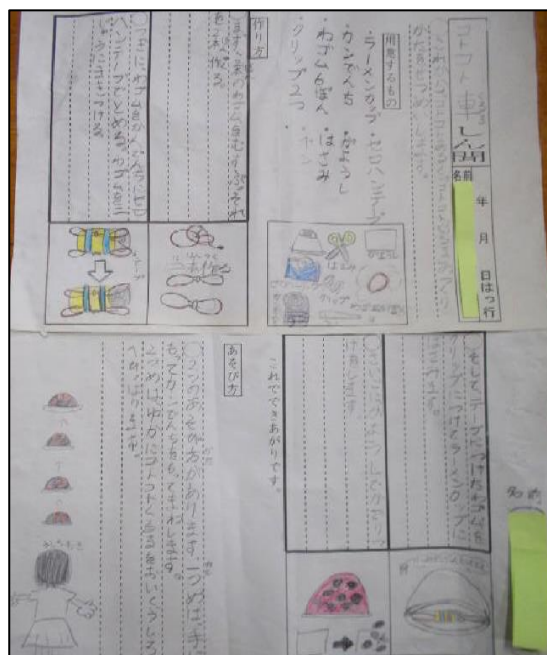
●指導の実際



本単元では，順番がばらばらになったおもちゃの作り方の説明の文を並べ替える学習を行い，分かりやすい書き方の工夫「説明のわざ」を導き出す活動を設定した。ばらばらになった文章を正しく並べ替える際，順序を考える手がかりとなるのが「順序を表す言葉」である。子どもたちには，はじめに「順序を表す言葉」のない文章を並べ替えさせ，次に「順序を表す言葉」

のある文章を並べ替えさせた。この活動により「順序を表す言葉」の必要性やそれを上手く使うことで，相手にとって分かりやすい文章になることに気付かせることができた。

単元の後半では，生活科とも関連を図って「1年生を招待して，きらめきあそびランドを開きたい。」という思いを高めたことで，意欲的に新聞を書く活動に取り組むことができた（右新聞）。授業者が事前に例示した新聞を参考にして，これまでの学習で見付けた「説明のわざ」を生かしながら，順序よく作り方の説明を書くことができた。文章に合うイラストも楽しみながら描き加える姿も多く見られた。生活科単元「きらめきあそびランド」では，自分が作った新聞を1年生に見せながら，おもちゃの作り方を分かりやすく説明し，一緒に作ったり遊んだりできた。



②第4学年 「社会科」実践 <新聞活用型+新聞作成型>

●単元名：「ゆるキャラの謎を解明！特色ある地域を調べよう」

●単元の目標：新潟県の市町村に関心をもち，特色ある地域の人々の生活を調べ，新潟県の市町村の特徴を考えることができる。

●育てたい思考力・表現力

【思考力】理由付ける力

【表現力】目的や意図に応じて，考えたことや伝えたいことを的確に書く力

●活用した新聞記事例（佐渡市）

2010年7月9日 新潟日報(左)

2016年7月9日 新潟日報(右)

2016年5月17日 新潟日報

「週刊ふむふむ」(中)

●新聞活用の意図

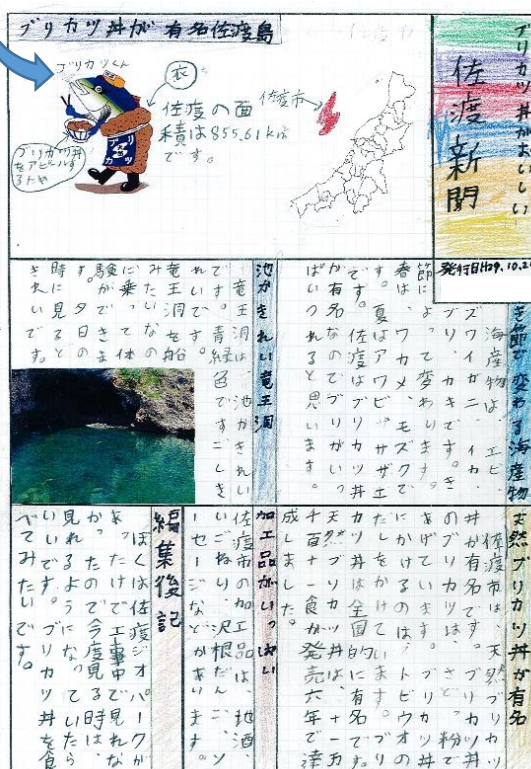
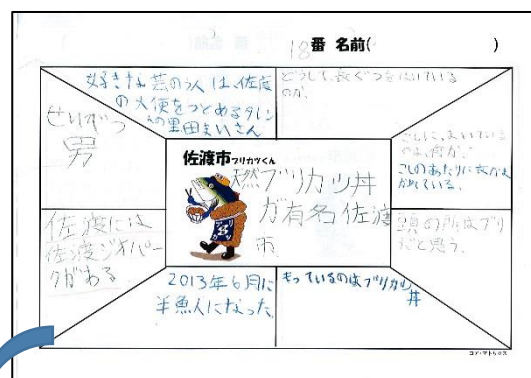
単元の導入として、楽しみながら市町村について調べる活動に入ることができるよう、新潟県の6市町村（佐渡・柏崎・妙高・阿賀野・見附・村上）の「ゆるキャラ」を活用し

た。各ゆるキャラの特徴から、市町村のおもな特徴が考えられるように、それらが載っている記事を各市町村3種類ずつ用意した。3種類の記事は、ゆるキャラについて書いてある記事、ゆるキャラについて書いていないが、市町村の特徴に関係ある記事を用意し、それらをまず読むことで、市町村のおもな特徴を捉えられるようにした。

●指導の実際

記事に出てくる「ゆるキャラ」を観察して、「顔が魚だから魚がたくさん捕れるのかな」「長靴をはいているのは漁がさかんなのかな」等、風貌から分かることを子どもはどんどん予想していった。そして、複数の情報を分類、統合して結論を導くことができる思考ツールシート（右上図）を用いて整理していった。その後の活動では、もっと知りたい市町村の特徴をパンフレットやインターネットを使って調べ学習をしたのち、情報を根拠にしながら、市町村の特徴を短い言葉で、シートの核部分にまとめることができた。子どもにとって馴染みのある「ゆるキャラ」の新聞記事を扱って活動を始めたことで、予想する楽しみや「なぜこのモチーフになっているのか」等、もっと調べてみたいという追究意欲を高めることができた。

単元の後半では、シートに書き出した情報から、いくつか選んで新聞にまとめた（右下新聞）。短くまとめた市町村の特徴は、新聞の見出しに活用した。完成した新聞は、冊子にまとめて学校の図書室に置き、来年度以降の学習資料として活用する。



③第5学年 「理科」実践 <新聞活用型+新聞作成型>

●単元名：「なぜ中津川が整備されたのか調べよう～流れる水のはたらき～」

●単元の目標：流水の様子を時間や水量，自然災害等に目を向けながら調べ，見出した問題を計画的に追究する活動を通して，流水のはたらきの規則性についての見方や考え方を育てる。

●育てたい思考力・表現力

【思考力】理由付けする力

【表現力】目的や意図に応じて，考えたことや伝えたいことを的確に書く力

●活用した新聞記事

1998年9月18日 津南新聞

（現：妻有新聞）※一部省略改

●新聞活用の意図

身近な河川で起こった洪水被害の新聞記事（地元新聞）を活用し，水害と既習の流れる水のはたらきを関連付けて考えることで，学びをより身近なこととして感じられるようにした。学習に必要なでない部分の記事を一部省略したり，難しい表現を易しいものに替えたりすることで，子どもが安心して読めるよう配慮した。

●指導の実際



単元導入時に中津川の見学を行い，そこで生まれた疑問を解決するように学習を進めた。見学で中流域以降に見られる人工的に整備された護岸や構造物にも着目させ，整備された理由を突き止めることを単元の課題とした。

流れる水のはたらきを学習した後，実際の水害について，既習内容を基に原因を考える学習を行った。水害が起きた場所を川の形や川幅，上流・中流等を手がかりに推測する活動

を行うことで，水害と流れる水のはたらきとの関係について考えを深めることができた。地元新聞を活用した授業では，「カーブの外側が，浸食力が大きいこと」や「細く浅い所に大量の水が一気に流れると決壊しやすいこと」，「傾斜の急な所は水の流れが速いこと」等，既習事項を根拠として実際に水害が起きた場所を地図上で特定する活動に没頭することができた。

単元後半では，学習した内容を新聞にまとめ，地域に発信する活動を行った。単元導入時に着目した人工的な護岸の様子について，保護者の認知度を調査すると，ほとんど知られていないことが分かった。その理由や学習で分かったこと等を伝えるという目的をもたせることで，子どもが「伝えたい」という意欲をさらに高めて新聞を書き切ることができた。



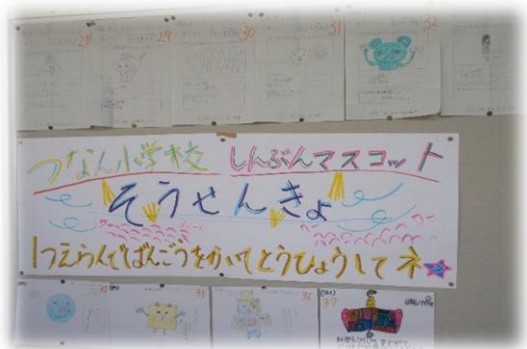
(2) 新聞とかかわる日常的な活動から

昨年度に引き続き、週 1 回の NIE タイム実施や玄関の「子ども新聞」の掲示等を行ってきた。放送委員会が毎日の昼の放送で読む子ども新聞や地元新聞の記事紹介がきっかけで新聞を読む子どもや社会の動きに興味をもつ子どもが増えた。また、今年度は放送委員会だけでなく、他の委員会でも校内 NIE を盛り上げる活動がなされた。以下にその一例を示す。

図書委員会による「新聞を読もう NIE マスコット」募集＆総選挙

図書委員会では、「もっと楽しく新聞を読む人を増やしたい」という思いから「新聞を読もうマスコット」の募集企画を行った。全校からマスコットとなるイラストを募集し、投票で選ぶ企画（右写真）である。全校からたくさんの応募があり、投票に参加する子どもたちも多くいた。

その中から決定した「新聞を読もうマスコット」が右の「新（しん）ピヨ」である。このマスコットを使ってステッカーにし、図書イラストコンテストの賞品にしたり、缶バッジを作って全校に配付したりと、NIE を全校で楽しむ姿が見られた。このマスコットがより「新聞」を身近なものにすることに一役買った。また、「マスコット缶バッジ」は十日町市の「ふれあいの丘支援学校」に制作を依頼し、その経緯を児童に伝えることで校種を超えた理解や交流の機会にもなった。



4 2 年間の研究から見てきたもの ～成果と課題～

(1) 新聞活用の授業研究から

右に示す表は、2 年間の新聞活用実践（教科）を新聞活用の型に分け、低・中・高学年・特別支援学級別に分類したものである。なお、「国語×総合」等の表記は、教科横断的な実践を示す。

この表から、思考力・表現力を育むために、教科を問わず、新聞の活用が可能であることが分かる。これらの実践から見られる「新聞活用」の成果として以下の 3 点が挙げられる。

1 点目は、教材や資料として活用できたことである。これは「新聞」が、学習教材・資料として有効だったことを示している。新聞の中には、子どもの思考を促したり、学びを深めたりするすばらしい情報があふれている。特に「子ども新聞」は、子どもに分かりやすく書かれていたり、写真やイラスト等が豊富であったりと活用しやすかった。また、地元新聞は、地域社会と自分たちの生活を結び

	新聞活用型	新聞作成型	新聞比較型	新聞比較+作成型	新聞活用+作成型
低 学 年	国生	語生	語生	国語	国語×生活
中 学 年	国算社道総合学活（保健指導）	語数社会徳合	社総	理 科	国語×総合 国語×総合 社 会
高 学 年	道徳×国語 理音社家総学活（食育）	語数社会徳合	総 合		社 会 理 科
特 別 支 援	国算体	語数教育	国 語		生活単元学習

付けやすい記事が多く、教材化しやすいものであった。つまり、学習のねらいや活動に合致した記事が見付かると、学習効果を発揮することが明らかになった。ただし、記事を見付けるための時間と労力がかかる点は活用上の課題と言える。

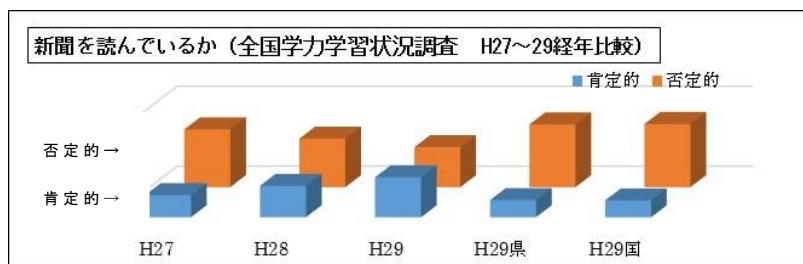
2点目は、どの学年も「新聞作成型」の新聞活用をしており、学んできたことを整理し、「新聞」としてまとめることが有効的だったことである。ただまとめるのではなく、教科をクロスオーバーし、書くことに意味ある動機付けをすることで、一層相手意識が明確になり、表現に対する意欲を高めることができた。

3点目は、「活用型」と「作成型」を組み合わせるといった、活用の型を組み合わせで単元を構成するとさらに効果的だった点である。これは、津南小学校の実践の中で生まれた型であり、特筆すべき成果と言える。新聞の内容や形式から学んだことを自分の表現、発信方法として活用していく学習の流れは、学びに連続性をもたせ、子ども自身に学習の目的をもたせるものにもなった。この活用法は、低・中・高学年および特別支援学級でも実践されており、どの学年にも有効な活用法であると言える。

一方、3つの型で実践が難しかったのが「新聞比較型」である。提案された実践が最も少ない活用型である。1年次の研究でも、実践が難しいといった声が出ており、学習内容に見合い、かつ比較できる記事をなかなか見付けることができなかったことがおもな要因と考えられる。また、比較する力は、育てたい思考力の1つではあるが、記事を読み、内容を理解した上で比較し、考える活動は小学生にとってやや難しい学習活動であったことも考えられる。

(2) 全国学力学習状況調査の経年比較・児童アンケートの結果から

右下のグラフは、平成27年度～29年度に行った、全国学力学習状況調査の質問紙「新聞を読んでいるか」についての肯定的意見と否定的意見の経年比較である。実践委嘱を受ける前と比較すると、肯定的な回答が増え、否定的な回答が減少している傾向にあるのが分かる。また、今年度の県や国の値と比較しても、津南小学校の6年生の新聞に対する意識が高いことがうかがえる。



また、12月にとった期末児童アンケートでは、「家で新聞を読んだり、教室にある新聞（ふむふむ等）を読んだりしていますか」という問いに対し、全校で70%の子どもが肯定的な回答をした。実践委嘱を受けた初年度（H28）の同時期のアンケートでは、肯定的な回答は60%前後であった。1年間の実践の積み重ねにより、「新聞を読む」と答える子どもが約10%増加した。新聞を身近にするための日常的な活動がこれらの結果にもつながったと考える。